

第 87 期を振り返って



2009 年度（第 87 期）会長 有信 睦弘

2009 年 4 月の会長就任挨拶の中では、製造業の地盤沈下、大学をめぐる欧米の動きと技術者資格、学生の工学離れ、に関しての問題意識の後に、日本の製造業や大学教育の課題に対しても学会の立場での迅速な対応に努力すると述べました。今から 8 年前のことですが、迅速な対応ができたかどうか。過去を振り返り始めると人の進歩は止まると信じて今まで進んできました。過去は無意識のうちに成功体験の蓄積として記憶に残るからです。柳の下に 2 匹目の泥鰌どじょうはいないと分かりながら成功体験を語る愚を犯さないよう注意しつつ、87 期を振り返ってみたいと思います。

4 月の総会ではイノベーションセンターの設立が承認されました。機械学会の活動に経済成長への寄与という明確な方向性を与える組織でした。しかし、科学技術の発達によるイノベーションは人々の生活を豊かにする一方、様々な観点で地球の許容限界を顕在化させ、成長には sustainable という視点が不可欠になっています。9 月にはコペンハーゲンに 12 か国の工学系学会の代表者が集まって、Future Climate に対する Engineering Solution が議論されました。当時の近藤大使を含む各国の駐デンマーク大使も参加されました。機械学会はロードマップを基に日本の取り組みを紹介し、全体としては技術的な備えはできているという認識を共有したと思います。しかし、2 年後の東日本大震災後の経過を見ると、当時の議論は楽観的に過ぎたかもしれません。また、この年には ASME の Code and Standard 部門が 125 周年を迎え、アメリカ大陸以外で初めて神戸で部門の会議が開催されました。本学会との合同会議で Stake Holder のニーズに応えるということが大きく取り上げられた記憶があります。また、タイの工学会と連携して、タイ機械学会の設立に協力するとともに日本機械学会国際チャプター タイ・セクションが設立されました。タイの工学関係者は技術者資格や工学教育認定の国際的同等性について十分認識しており、日本のような成功体験を持たないが故に、世界の状況に正当に反応しているとの印象を強く受けました。タイ・セクションに関しては継続的なメンテナンスも必要です。

87 期の理事会で議論された重要議題の一つが学会の一般社団法人化でした。これは、政府の公益法人制度の抜本的改革の中で所謂公益法人改革関連 3 法が成立した結果を受けて、学会が公益社団法人になるか一般社団法人になるかの何れかの選択をしなければならなくなりました。従来の主務官庁の傘下でなくなることや「公益」の意味が充分明確でなかったこともあり、学会の足並みもそろわず、互いに様子見の状態でした。機械学会は事務局の早期からの対応と努力の結果もあり、理事会で何回かの議論の後に一般社団法人の道を選択しました。一般社団法人化以後は、企業のような一般の法人と同様のガバナンスが要求されます。内部統制やガバナンスということがそれ程良く理解されていない状況の中で制度の整理を進めた事務局の苦労は並々ならぬものがあったと思います。もう一つ強く記憶に残っているのは事務手続きの IT 化です。当時の菱田理事には随分奮闘いただきましたが、その後どうなっているのでしょうか。

11 月には学術会議で「機械工学の展望－21 世紀の役割と貢献」と題するシンポジウムとパネルが行われました。科学が自然の中に法則や新たな現象を見出し、新たな知識の体系を作り出していくのに対して、工

学は特定の目的を達成するために科学的な知識を統合・融合していく作業とも考えられます。そのような観点で社会や人の価値創造を目指した「設計科学」の重要性が指摘されました。機械工学における設計の訓練はイノベーションを目的に牽引するために様々な知識や技術を統合・融合することにつながります。イノベーションセンターを中心に、学会の中で自覚的な取り組みができないものでしょうか。

さて、退任の挨拶では、学会と社会の関係の中で、技術者資格と教育認定の重要性、持続的発展という視点での取り組みの必要性、国際化、工学離れへの対応を述べた上で、責任と権限を明確にし、権限委譲を進めた学会運営の重要性を述べています。87期には政権交代や事業仕分けという大きな変化がありました。中でも「一番でなければいけないのか」という某議員の発言に危機感を持った学会会長が連名で文部科学大臣あてに要望書を出したことも記憶に強く残っています。

世の中の変化や技術、特に情報技術の進歩は益々加速しています。このような中で私達は人や社会にとって価値あるものを作り出すという視点を忘れるべきではないし、それが科学技術の進歩と同じ軸上にあるとは限らないことも自覚すべきです。国連が決定したSDGsはInclusiveという視点で、つまり誰も後に取り残さずに到達するゴールです。機械学会は取り残すことも取り残されることもなく進んでいかなければなりません。